

春燈

2022 August

8月号



久保田万太郎の句

あいくち
ヒ首かあらずきせるの涼しさよ

『冬三日月』昭和二十七年

平成十三年発行の『読本 久保田万太郎』を読み返している時、戸板康二の「その独自の句境」の中で、この句に目が止まった。▲里貞彦氏を「きせるをヒ首のように使う人だ」といったのは、泉鏡花であるが、と文は続くが、私は人の言ったことを瞬時に俳句に仕立てる万太郎の芸の奥深さに、圧倒される思いがした。人の及びもつかない万太郎の世界をそこに見たのである。

金山雅江

久保田万太郎の句

死んでゆくものうらやまし冬ごもり

「春燈」昭和三十八年

俳句とは、十七文字の器に盛られた作者の「心根」あり、それを読者の追体験で補って一句が成立するものだと思う。それなりの解釈を得て、読者は感動を覚える。

この句には「一子の死をめぐりて」と前書が付されて更に思いを深めることになる。先師七十三歳の十一月、慶應義塾に死後の著作権一切の寄贈を申し入れた翌月、一緒に暮らした最愛の女性の死、看取りの句である。

上野進

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

芝原をとびとび飾る庭石菖

山々のかたぶく村や田水張る

麦秋の羽搏く鳥に若さあり

どくだみの花やいちにち善き心

竹林の夏めく風のそよぎかな

いちまいの葉書の遅筆閑古鳥

振花の三つ曲がりしを言祝ぐや

曇りてもひねもす降らず傘雨の忌

夏草のかなた友呼ぶ故山かな

ががんぼの生まれ立てなる灯影かな



燈下集



○ 三代川玲子

緑蔭に吸はれて影を失ひぬ

露のすぢ引くや雨音ひきよせて

るいるいと蟹の子作る砂団子

多佳子忌やま白き薔薇の粲々と

卵溶く薄暑の夕の明るさに

○ 本田保

激動の時代生き抜き昭和の日

血のメーデー樺美智子の抵抗死

何処から来て何処へや夏の蝶

わかものに邪魔にされたる甚平かな

手仕事でなければ出来ぬ袋掛

○ 豊谷青峰

江戸前と染めし寿司屋の夏暖簾

板前の鰹の骨切りあざやかに

食前酒窓の向かうの夕焼雲

幕間に鰻重届く楽屋かな

職人の早飯喰や冷奴

○ 高埜良子

旅心湧き立つ八十八夜かな

友待つや茶房に真紅薔薇一輪

新茶汲む倅若き母とゐて

単衣着て仰ぐ城址の野点傘

雨上がる十葉白を極めけり

○ 瀬戸峰子

閉ざされし艇庫の脇に百合香る
湖のほとり山百合の香をもてあまし
笹百合や高原に香を撒散らす
身罷りし句友に沈思鴨足草
唐突の訃音に仰天銀竜草

○ 清水美子

水琴窟夢のふくらむ子供の日
出来る事一つ増やして柏餅
薔薇の棘十三日の金曜日
鯉のぼり住めば都の八十年
初夏や平和な国の片隅に

○ 片山博介

後朝てふ言葉の廃れ明易し
海月にはくらげの気骨波を越え
南吹く外人墓地に夕汽笛
鉄錆のにほひ砥石に走り梅雨
不機嫌な猫と留守居や籐寝椅子

○ 府川昭子

轉に応へ小川の歌ひ出す
十葉にしづかに闇の降りてくる
糠漬の切口著き立夏かな
逆上がり少女に出来て夏来る
知らぬ間に蚊にさされぬる五月かな

○ 矢口笑子

子が真似る母の口癖カーネーション
結婚記念日なんじやもんじやの花盛り
前略と書出す手紙走り梅雨
地下鉄の乗換口や夕薄暑
黒南風やガードレールの潮傷み

○ 松山三千江

夏めくや階段多き銀座線
髪まとめ五月の女性車引き
空から地から霞切の声湧出づる
逃げ足の早き丸葉走り梅雨
万緑や山高帽のドアボーイ

○ 篠原幸子

「学び舎農園」じやがいもの花美しき
母なくて子なくてカーネーションを吾に
あぢさゐの彩ほぐれゆく常の道
青時雨小さき祠に千羽鶴
渡らむと寄るや遠のく虹の橋

○ 藤原若菜

今朝の夏碧き紅茶の缶開くる
葉桜や万太郎忌の雨もよひ
退院の祝さがすも初夏の書肆
郭公やよび起こさるる里心
麦秋や川風を行く師の背

○ 大文字孝一

露座仏の御身を染むる緑かな
神の住む山満々の新樹光
傘寿なほ夢追ひかけて五月晴
深追をさせて消えたる蛍かな
原色の似合ふ街並南吹く

○ 和田絢子

青葉中ほつほつ灯る義士の町
濃紫陽花造船所への道行止り
夏燕夫北国へ旅せし日
聲音も風音もなく額の花
バラ園のアンネの薔薇に人群れて

○ 神田恵琳

少年の刈上げ頭若葉風
竹落葉踏んで裏山屋敷神
新茶汲むひとりの時を樂しめり
おだやかな一と日過ごせり竹落葉
足裏に下駄の柁目の薄暑かな

○ 小山繁子

自転車のベルの挨拶若葉風
村めぐる移動図書館麦の秋
横顔のいつしか少年風薫る
跡取のもどらぬ畑豆の花
影といふ見ゆる涼しさ見てをりぬ

○ 小島昭夫

鯉のぼり句会の窓へにじり寄る
知らぬ子にぢいと呼ばるや麦の秋
青空とひまはりの国永遠にあれ
抱かれて香水ほのか母三十五
打水や京のをんなのしたたかさ

○ 渡辺若菜

引越しは森ある町へ風薫る
思ふこと今は言へさうカーネーション
夏めくやショーウインドーに鷗の絵
電波の日廃校跡の文化村
湖をすべるエイトや山青葉

○ 西岡啓子

やはらかき稜線幾重桐の花
老鷲やまづ山門に深き礼
新旧の僧のこゑ和す五月かな
畑土のかすかに匂ふ走り梅雨
暑き日や波にゆれゐる杭の影

○ 中村紀美子

黄しやうぶの古沼に色を写しけり
波なりの松のかしぎや夏の浜
荒浜のひとすみ照らす花いばら
夏座敷たたみの青をたのしめり
遠く聞く祭の稽古笛高音

○ 浅木乃映

新緑の風の開きし一ページ
ぼうたんの風に比翼の句集かな ㊦
下総の雲の早さよ行々子
衣更へて瀉の風にも光にも
心地よき風に日傘をたたみけり

○ 懸林喜代次

ひよめきのかすかな動き柿若葉
膝の猫なでつつ酌むや傘雨の忌
新任の若き神官樟若葉
角打ちの今日のおすすめ鱧の皮
夏川に派手に落ちたる斬られ役

○ 豊谷ゆき江

水打つて板前修業見習ひ中
夏祭の頭は今も男前
心太その易凌ぎの返事して
みつ豆に出来ぬ約束また交はし
馴されし振りもしたしき冷酒かな

木村梨花

カーネーション白あふれしめ母恋し
陶枕の藍の山河に旅の夢
旅にゐて又旅想ふ青葉かな
短夜や開きしままの旅鞆
竹の子のはちきれさうな荷を解く

○ 後藤眞由美

滝音の育ててゐたる若葉かな
緑さす傘雨の墓石安らけし
猫の目のけだるく開く薄暑かな
夏の月ジョッキ片手に談笑す
妖精のゐるやしぶきに小さき虹

溝越教子

初夏や六百年の乳銀杏 (笠置寺)
いつの日かこの子も母に姫女苑
木香薔薇の小さき賑はひ垣根越ゆ
麦の秋老いへの一步認めけり
石楠花にしとどの雨の夜半となり

川崎真樹子

齋藤晴夫

無言館の打ちつ放しの壁薄暑
緑蔭のされかうべより咀嚼音
青風吹けよこの身を白くせよ
実梅落つ叶はなかつた夢の数
サルトルの貌青蛙動かさる

邂逅の人の如しや京椿
枝の先水に親しむ遅桜
純白の芍薬咲きぬ一重八重
白片は白寿の好み山法師
老いさびの相聞歌とや落し文

余言

鈴木直充

蜜豆や母より享くる長寿運

松橋 利雄

お母様は長寿に恵まれた方なのであろう。現代風に言えば、ご先祖から長寿遺伝子を受け継いで長生きをしたのかもしれない。作者は、お母様と同じように年齢を重ねて来て、しみじみと「長寿運」を賜ったと感謝している。「長寿遺伝子」と今様には言わず、「長寿運」と授かりもののように表現しているが、「運」に母なる方との深いえにしを感じている。また、この句に配された季語の「蜜豆」は、父性とは異なる甘やかな母性が象徴化されている。

覚悟して捨つるふるさと桐の花

岩永はるみ

人が生まれ育つたところが「ふるさと」である。誰でも誕生した地の風土にはぐくまれて成長する。心身にふるさとの風、水、土の香が染み込み、そこが最も心地良きところ

となるのである。

ところが、作者はゆえあつてふるさとを出ることになった。きっかけは判らないが、生まれた地を離れるのは迷いに迷った末の決断だったにちがいない。それが「覚悟して」の表現になった。けれども、この句の「覚悟」と「捨つる」の措辞の背景には悔恨の情が隠微に揺蕩うている。その悔恨の情をうすめてくれるのが桐の花である。桐はなにやら懐かしい紫色の花を咲かせ、心を鎮めてくれる。作者のふるさとも桐の花が咲いていたであろう。そして新しく暮らす地にも咲いているのであろう。

亀の子の早や覚えたる甲羅干

武田 巨子

日本の固有種の石亀は、夏に畦や畑の土の中に産卵する。孵化するとすぐに水辺へ向かい、自力で昆虫や藻類など何でも食べて育つ。親は産みっぱなしなのだが、子亀はけなげに生きてゆく。

亀は蛇や蜥蜴と同じ変温動物で、日光浴をして体温を上げないと行動できない。だから、子亀は本能的に甲羅干をしたのだらう。蛇や蜥蜴は、人が近づくとすぐ逃げるが、亀たちは岸の石垣や池の中の石の上でのんびり甲羅干を楽しむ。小さいながら、子亀の悠揚迫らぬ姿が作者の心を癒してくれるのである。

余花未だ甲斐と駿河の国境

金山 雅江

甲斐は山に囲まれた国で、駿河は海に開けた国である。この二つの国を隔てるのは霊峰富士である。国境には、富士山に従うように二千メートル級の笹ヶ岳や七面山が屹立している。

国境の山岳地域の春は遅く、桜は立夏が過ぎてからようやく咲き始める。甲斐の人も駿河の人も平地に咲いた花を賞美したあとに国境に咲いた花にまみえるのである。「余花」といえども、二つの国の山々が力を込めて咲かせた凛乎とした花なのである。

原稿の結び定まり風薫る

佐渡谷秀一

文章の書き始めが頭に浮かんでも、結語が想定できない人が多いにちがいない。長編小説を書く作家の多くはプロットを立ててから起筆する。中にはいきなり書き進める人もいるだろうが、いずれも結びには苦労するだろう。最後の件が余韻の深さを左右するからである。

作者も着実に筆を進めてきたのだが、どうしても結びが決まらなかつたのだらう。決めつけすぎてもいけない、曖昧すぎてもいけないと煩悶していたのだが、ふつと結びが定まった。「風薫る」に書き終えた安堵感が溢れている。

青嵐せんたくばさみをとばしけり 小泉 三枝

作者は洗濯を終えて、衣類を干そうと物干竿を見たら、洗濯ばさみが無い。折からの青嵐に飛ばされてしまったのだ。竿に干し物を掛けただけでは、樹々を騒がす青嵐にまたすぐに攫われてしまうだろう。

作者は、いたずらの過ぎる青嵐に苦笑し、家ぬちに洗濯ばさみを取りに戻ったであらう。今度は飛ばされないのでなくさんのはさみで洗濯物を止めなくてはならない。何度も水を通した着馴れたものを広げて、パリッときつちりと干すのである。青嵐の若々しい風は、洗濯物をたちまち乾かしてくれるにちがいない。

知らぬ子にちいと呼ばるや麦の秋 小島 昭夫

作者は、通りすがりの子どもと目が合ったのだらうか。そのとき、作者の顔がほころんだ。子どもは、自分をあたたかく受け入れてくれた幸福感から「ちい」とつぶやいたのだらう。「ちい」は老年の男性の自称、他称だが、初めて会った子どもにも言われると自分の翁ぶりを再認識させられたにちがいない。老いには内面的、外面的なものがあるが、ふと他人に言われた一言で自覚させられることが多い。麦が黄金色に実る頃、作者と子どもは芳しき出会いをしたのである。

当月集

鈴木直充選



○ 立 竹 人

鯉のぼり空は青さをはぐくめり
海までは登り坂なり蟹の穴
蟹出づるまだ引潮の波のなか
萍のかたまりやすき流れかな
照りかげりある浮草のひとつこ

○ 辻 泰 子

青梅や夜来の雨の粒光る
緑蔭の木椅子を己が書齋とす

電線に遊ぶ都会の燕の子

弁慶の腰掛石の梅雨じめり（瀧福寺句）

梅天や墨痕美しき腰越状

○ 重 実 ひとみ

日本晴てふ空のあり初鯉
誘蛾灯点りていよいよ農繁期
豆の飯おすそ分けて姉妹
父の日や帽子の好きな父であり
明日からは雨の予報や桜桃忌

○ 小 林 文 良

夢殿に行着く茅花ながしかな

塗師に朱の艶の生き甲斐夏来る

緋目高の馴れて水面に鼻の列

やはりまた噎せつつ白む心太

晩餐のホテルの蛍ほうたるよ

○ 中 島 美 冬

マリオネットの姫の踊るや五月闇
薫風や谷戸抜けて訪ふ鎌倉宮
こどもの日二段ベッドの口喧嘩
退職の辞の晴れやかや風薫る
何はともあれクラブハウスの生ビール

春燈の句

鈴木直充選



宮 子

リラ冷や函館は坂多き街
初夏のカリヨンに歩を合はせゆく

蓮一輪盥にそだて露地住まひ

せせらぎの音の落込む木下闇

行々子声を夕日に残しけり

薫風やせせらぎまたぐ太鼓橋

開墾の池のさざ波四葩咲く

石垣にをさまりつかぬ蜥蜴の尾

まだ見えぬ泉下の扉バナナ食ふ

自転車の主あらはれず夏の草

とまどひの紐の長さや釣忍

裏庭を歩く日課や緑さす

黒南風や窓打つ雨に眠れぬ夜

井 上

朝からの夏の日差に戸惑へり
寒暖の激しき日々を梅雨籠

馬鈴薯の花や土寄せ追肥せる

野菜みな腕たて伏せや青嵐

白玉粉売る白玉を傍らに

風涼し草木たのしく揺れてゐる

長男と次男は年子柏餅

くるくると粽の紐の長さかな

戦ひの終らぬ国ぞ麦の秋

万緑や生命線の長き人

夏場所や一人横綱責果す（照の軍團）

マスクして神輿担ぎし氏子かな
久しきや完全試合夏の空（佐々木明希選手）

近道のつもりが遠し桐の花

木村秋草子

千 葉

白井さゆり

千 葉

東 京

鈴木としお

東 京

山口 地翠

埼玉

竹中砂帰路

栃 木

森 ぶく

埼玉

竹中砂帰路